
マクロスF ~イツワリノエイユウ~

ろっし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マクロスF 〜イツワリノエイユウ〜

【Nコード】

N9952P

【作者名】

ろっし

【あらすじ】

エースコンバットZEROの主人公がマクロスFの世界に飛び込みます。割と真面目な話で、少しサスペンスチックになるかもです。

作者は劇場版マクロスプラス、OVA版マクロス・ゼロ、TVアニメ版マクロスFしか見た事ありません。外部知識はWikipedia程度です。

【亀更新です】

#00 ゼロ（前書き）

初投稿です。

まだテスト段階なので、本格連載はもっと先になると思います。
見切り発車で大変申し訳ありません。

#00 ゼロ

ベルカ連邦　　オーシア大陸北部に位置するその国の歴史は長く、王朝時代から精強なベルカ騎士団を率いるなど、領土は小さいながらも強大な軍事力を背景に成長を続けてきた国である。

1900年代初頭に繰り広げられたオーシア戦争後はその軍事力と工業技術を更に発展させ、？伝統のベルカ空軍？とまで呼ばれたベルカ空軍は他国の規範となり、その名を世界へ轟かせた。

しかし、1980年代に入るとベルカに不穏な状況が訪れる。

長年に渡る国土の拡大や、それに伴う軍事費の増大は次第にベルカの財政面における許容範囲を超え、ベルカ経済を圧迫した。

この危機的状況を打開すべく1988年にはベルカ連邦法を改正し、ウステイオを初めとする東部自治領を独立させて自国から切り離した。

それでも不況は収まらず、経済不安やオーシア連邦による領土切り崩しの中で？昔ながらの強いベルカ？を求める声が高まり、それに応える形で1991年に極右政党が政権を掌握する。

そして1995年、ウステイオ共和国での天然資源発見を契機に、旧領であったウステイオ共和国やサピン王国、オーシア連邦への侵攻を決断、宣戦布告を行った。

ベルカ戦争の始まりである。

伝統のベルカ空軍の前に準備を怠った各国は尽く敗走していき、特にウステイオ共和国は開戦後数日にして山岳部を除く大半の領土を占領された。

侵攻を受けたオーシア連邦等を中心とする周辺諸国は連合作戦を計画し、それを受けてウステイオ臨時政府は地理的条件から山岳地帯にあるヴァレー空軍基地に残存航空戦力を終結、残された第6航

空師団を外国人傭兵部隊として再編した。

程なくして連合軍によるウステイオ反抗作戦が展開されると、第6航空師団所属のとある二機編隊による著しい活躍もあって次々に戦果を挙げ、領地を取り返していった。

作戦開始から二カ月後、ついに連合軍はウステイオ共和国の首都ディレクタスの奪還に成功し、これを境に今までとは一転してベルカへの侵攻が開始された。

連合軍による快進撃は続き、ベルカ絶対防衛戦略空域？B7R（通称：円卓）？を制圧すると、ベルカ東部を代表する工業都市ホフヌングに対して無差別爆撃を行うなど苛烈な作戦が目立つようになった。

この頃から、侵略から解放するための戦いは、各国が領土を取り合う略奪戦争へとその姿を変貌させていく。

そして、国内に厭戦ムードが漂う中、追い詰められたベルカ連邦の強硬派は最悪かつ悲劇的な選択をしてしまう。

自国内における、七つの戦術核爆弾の同時起爆。

七つの巨大なキノコ雲が立ち昇り、それはすなわち、同じ数だけの町と民間人を含む多くの命が消え去った事を意味した。

この想定外の自爆攻撃に混乱した連合軍はベルカ北部への進撃を諦め、ベルカ連邦自身もまた政治的、軍事的に深いダメージを負った。

これにより停戦への模索が開始され、ベルカ戦争は悲しみの内に終結するかに思えた。

12月25日、ベルカ軍上級将校を中心に、オーシア連邦、サピン王国、ウステイオ共和国、ユークドバニア連邦共和国等各国の将兵を含む大規模多国籍クーデター組織“国境無き世界”が蜂起。ヴァレー空軍基地を含む各国の拠点が次々と襲撃を受けた。

連合軍は急いで国境なき世界の実態を調査すると、その本拠地がベルカ軍のダム擬装型ミサイルサイロ基地？アヴァロンダム？であると判明する。

同時に試作型大量報復兵器？V2？の発射準備を進めている事も明らかになると、連合軍は総力を上げたクーデター鎮圧作戦に打って出た。

12月31日、連合軍による作戦が決行されると、今までに類を見ない大規模な空戦が展開された。

様々な国籍が敵味方に入れ乱れる国境を超えた熾烈な戦闘の果てに、

世界の命運はヴァレー空軍基地第6航空師団に所属する？たった一人の傭兵？に託される事となった・・・

『戦う理由は見つかったか？』

その通信は前方に相対する戦闘機からだった。

前進翼の白い機体で、右翼だけに塗装された赤が誇らしげに映えている。

初めて見るその機体は、ついさっき自分の僚機をレーザーらしき攻撃で撃墜した。

恐らく、機体上部に搭載されているあの大きな装置から発射されたものだろう。

倒すべき敵、しかし、その声に何故か懐かしさを感じた。

『相棒』

その一言でレトは気付いた。

いる筈のない家族に対するかのような、この懐古心の正体に。

「まさか、ラリーなのか？」

ラリー・フォルク、TACネームはピクシー。

？片羽の妖精？と呼ばれ畏怖された傭兵。

自分と同じガラム隊の僚機として共に戦場を駆け抜け、兄の様に慕っていたかつての相棒。

そして、あのベルカ国内の戦術核同時起爆を境に姿を消していた筈であった。

何故、ここに？

ガラム1、聞こえるか！？

核サイロの再起動を確認！作戦は続行、交戦せよ！！

A W A C S（早期警戒管制機）からの通信にレトは耳を疑った。
核サイロは自分が全て破壊した筈であったが、どうやら詰めが甘かったようだ。

状況分析を開始する。それまで持ちこたえろ！

持ちこたえる相手は、勿論あの戦闘機。

この状況で出てきたという事は、もはや間違いないのだろう。
何となく気付いてはいた。

ラリーが、国境無き世界の一員になったであろう事は。

『降ってきたな』

愛機であるF-15Cのキャノピーの前から後ろへと流れていく
白い粒子。

もう年末だが、今日はやけに寒い朝だった事を覚えている。

「それが、あんたの選んだ道か」

『そついうお前は、未だに迷子か？』

互いの機体の擦れ違い様に交わされる会話。

質問に答えるのを待たずラリーは機体を急速反転させると、レトをレーザー砲撃のレンジ内に入れるべくスロットルを最大まで開ける。

ラリーの意図を読み取ったレトはレンジ外に逃れるべく機体を急上昇させると、つい先程まで機体があった空間を赤い光線が貫いた。

かなり際どいタイミングであつた事にレトは肝を冷やすが、最初の砲撃と併せてレーザーのおおよその射程距離を確認する。

レトは弧を描く軌道から機体を捻らせ降下に転じると、ラリーの背後を取るべく急速前進。

『不死身のエースつてのは、戦場に長く居た奴の過信だ』

レトは空対空短距離ミサイルのシーカーに標的を収めようとするが、ラリーの機体はまるで誰かが手に持って動かしているかのようには俊敏な回避機動でシーカーの追尾を振り切り、逆にレトの後ろを取るべく右舷へ急速旋回。

負けじとレトは左舷旋回しながらコークスクリューの軌跡を描くようにダイブ、背後を譲らない。

『お前の事だよ、相棒』

「俺は過信なんかしていない！

自分の無力さは、あの時に思い知ったさ・・・」

あの時、ホフヌングに対する無差別爆撃の現場に、レト達ガルフ隊はその爆撃部隊の護衛として参加していた。

無線に飛び込んでくる地上からの救援を求める叫び、誰かの悲鳴、子供の泣き声・・・。

こんなのは間違っていると思いつつも、結局救う事も何も出来ないまま、ただ空を飛んでいた。

無数の火の粉が舞い散る、真つ赤に照らされたあの夜空を。

『なら何故お前はそこにいる！？』

ここから境目が見えるか？国境が俺達に何をくれた？』

国境。国を跨ぐ傭兵である自分にとっては、正直計り知れないものである。

計り知れないという事は、自分には然程重要ではないのだと考えていた・・・この戦争が始まる前までは。

敵や味方から戦いを通じて感じた、自国に対する誇り、愛着、忠誠心。

羨ましいと思った事もあった。どれも自分には無い感情だろう。

国家を想い、皆と団結し、共に前へ進む。

けれど、こうも思う。

例えば国が無かろうと、仲間が喜ぶなら共に明日を歌い、誰かに傷付けられたのなら戦いを挑むだろう。

きつと、自分自身も。

「・・・確かに国境なんて必要無いのかも知れない。

けれど、国家を消しても争いが無くなるとは限らない！」

『変革をしなければ、世界はこれ以上前に進む事は出来ない！

お前も身を以て体感しただろう、国家の醜さを』

平行線を辿る両者の主張。

この間にも雪空の下、激しい攻防が繰り広げられていた。

著しい機体性能差からレトは後方からの攻撃を諦め、ラリーが迫ってきた所を回避してカウンターを仕掛ける戦法に切り替えていた。しかし、レーザーを全て避け切る事は難しく、致命傷こそ受けていないが機体のあちこちに線状に融解した被弾痕が刻まれていく。

一方、ラリーの方も試作機故に調整が万全ではない機体の制御に苦心し、決定機を捉えられないでいた。

灰色のキャンバスに描かれる二つの白煙の軌跡は互いに絡み合い、時に雄大なカーブを刻みながら激しく、華麗に動き回る。

これを地上から見ている者がいるならば忽ちに魅了され、こう言

うだろう。

まるで、情熱的なダンスを踊っているようだ。

敵機から地上への信号を確認。

ガラム1、奴が“V2”管制を握っている！

「くっ、そういう事か」

A W A C Sからの報告を受けて、レトはこの戦いの重さに気付いた。

ラリーは最初から自分に一騎打ちを挑む気だったのだ。

連合軍ではなく、この自分だけに。

止められるものなら、止めてみると。

『戦いに慈悲はない。

生きる者と死ぬ者がいる、それが全てだ』

「・・・」

『奮い立つか？

ならば俺を落としてみせろ！』

「なめるなッ！」

レトは強く言い放つと、正面からのラリーのレーザー砲撃を螺旋を描くようにロール、つまりバレルロールによって寸での所で回避すると、左舷旋回していくラリーの機体へとアタックを仕掛けるべく縦方向にUターン インメルマンターンを開始。

狙いは標的のレーザー砲。いかにも急場凌ぎで取り付けられた感じがあるので、耐久力は低いと見たのだ。

天地がひっくり返し強大な旋回Gによって身体がシートに押し付けられ、一瞬でも気を緩めれば意識を持っていかれ兼ねない程の負荷を受けても、レトはただ歯を喰いしばって標的に意識を集中させる。

急激に加速する時間の中、F-15Cの機首がラリー機が通るであろう軌道を捉える。

（来た！）

射軸がラリーの機体と交差するのを見越して、レトは機関砲のトリガーを引いた。

まるで巨大な蠅が羽ばたくかのような重低音を轟かせて20mm弾が解き放たれると、一直線に標的へと牙を剥く。

攻撃を察知したラリーは機体を振るように強引にダイブさせるが、躲し切れず垂直尾翼とレーザー砲に何発か喰らってしまう。

すぐさま被害状況を確認すると、尾翼の損傷は軽微だがレーザー砲はコンデンサーの故障により使い物にならなくなった事が判明。仕方なくレーザー砲モジュールをパージして機体を身軽にする。

『やるな相棒ッ！・・・だが、時間だ』

ラリーが言い終えるのと同時に、地上から大気を震わす爆音が聞こえてくる。

ついに、核サイロからV2ミサイルが発射されたのだ。

まるで巨大なオベリスクのようなそれは、大気圏外へ飛び出さんと天高く上昇していく。

「くそっ、V2が！」

『惜しかったな。』

だが、歪んだパズルは一度リセットされるべきだ』

「どれ程の犠牲者が出るのか分かっているのか!？」

『相棒、これは終局じゃない。ここから全てが始まる。』

このV2で世界を?ゼロ?に戻し、次の世代に未来を託そう』

レトも頭のどこかでは理解していた。

確かに今の世界には大きな転機が必要なのだろうと。そのためには、大きな犠牲が必要になるのかも知れないと。

ラリーは未来を守るために今を代償にしようとしている。何が正しいのかは分からない。それは歴史が決める事だ。

もしかしたら、ラリーの行いは永劫の未来をもたらすものかも知れない。

それでも、例えそうだとしても、自分は・・・!

こちらAWACS。聞け!ガラム1。

敵機の解析が完了した。コード名は“モルガン”。

その機体は今ECM防御システムに護られている。ミサイルで狙えるのは前方のエアインタークのみだ

インターク、つまり正面角度からヘッドオンするしかない。

どの道後ろを取れない事は分かっていたのだ。上等だ。

今そこで彼を討てるのは君だけだ。“円卓の鬼神”、幸運を祈る!

鬼神・・・自分の身の程に合わないその名を、俺は嫌いだつた。所詮、誰よりも多くの敵を、人を殺したから与えれた称号に過ぎない。

でも今は、その名に見合う力が本当にあるのならば、俺は切望する。

例えその力を振るう相手が、自分に生きる道を標してくれた戦友だとしても。

「ラリー、俺はあんたみたいに未来を見続ける事は出来ない。目の前に救える人々がいるのならば、俺はもう迷わない」

「・・・そうか、それがお前の戦う理由か」

ラリーは諦めたかのような、それでいて納得したかのように返事をした。

ここが戦場であるのかを忘れてしまいそうな、まるで日常の語りをしているかのような時間が流れる。

「俺とお前は鏡のようなもんだ。向かい合って初めて本当の自分に気付く」

「ラリー・・・」

「似てはいるが、正反対だな」

それは、決別の言葉。

互いに志は同じだった。無益な争いから人々を救いたい。ただ方法が違ったに過ぎない。

未来を見据えて犠牲を払うか、今を見つめて救い続けるか。そこに善悪は存在せず、ただ事実のみが歴史に刻まれる。ならば自分は、己の道を貫くのみ。

「俺の全てをあんたにぶつける。」

まだここにくたばる訳にはいかない」

『望むところだ、レト。』

俺達の交戦規定は唯一つ・・・』

？生き残れ？

死闘が始まった。

レーザーを失ったラリーだが、機体性能やECM防護システムによる優位性は変わらずレトを後方から執拗に追跡する。

機関砲かヘッドオンからのミサイルしか攻撃手段が無いレトは、何とかラリーに追尾を躲して距離を取ろうと懸命に回避機動を行うが、離すどころか逆にその距離は縮まっていく。

ついにはモルガンのミサイルシーカーに捕捉され、発射。

その瞬間レトは機首を上げ、青色に塗装された両翼をラリーに見せつけると、急激に速度を落として後ろに流れる事でミサイルをやり過ごす。

一歩間違えれば失速して墜落する危険な賭けに勝ったレトは、そのままモルガンの後方に占位すると間髪入れずにGUNファイア。

ラリーは慌てる事なく機体をロールさせながら機首を下げて一端潜ると、今度は逆に機首を起こして急上昇。

驚異的な加速力で一気に高空へ舞い上がると、鋭い曲線を描いた後に獲物を狙う鷹のようにレト機目掛けて急降下。

それから逃げるようにレトは地上へ機体を飛ばすと、山脈を縫うように走る深い谷へとラリーを誘い込む。

左右を切りだった崖が流れ、曲がりくねった峡谷を正気とは思えない程の速度で飛び抜ける。

レトは後ろからピツタリとモルガンが付いてきている事を確認す

ると、前方に立ち塞がる岩壁に向かって速度を上げる。

谷がほぼ直角に曲がっているため行き止まりのように見えるのだ。もう間に合わない、という所でレトは岩壁に残り少ないミサイルを放つと操縦桿を思いっきり引いて急上昇。

急激な加速G方向の変化に身体が悲鳴を上げ、意識が飛びそうになるのを堪えると、後方から爆発音が響き渡った。

山壁から赤い火球が膨れ上がり、弾け飛んだ岩石の欠片が散弾の如く辺りに撒き散らされる。

（どうだ！？）

ミラーで後ろを確認する。

立ち昇る黒煙の中、白い何かが飛び出して小さな閃光を明滅させる。

「くっ！」

呻きながらレトは急いで回避行動を取ると、機体を掠めて機関砲弾が通り過ぎていく。

『あの程度じゃ俺は落ちない』

逃れられる筈のないタイミング、爆発の中でラリーは飛び交う礫を潜り抜けた。

それはもはや機体や技術云々ではなく、執念。

譲れないものがある、揺るぎ無い信念がもたらしたものだっただ。

小細工は通じず、残された時間も少ない。

正面攻撃、これしかラリーを撃ち破る手段は無いとレトは悟った。

なおも続く機関砲の雨からレトは機体を急旋回させて何とか逃れ

ると、そのまま全速力で距離を取る。

ラリーも同様に旋回してレト機を追い掛けるが、前方で起きた突然の事に驚き焦った。

レトが急反転してそのまま機関砲を撃ちながら特攻してきたのだ。ラリーも負けじと撃ち返し、至近距離で両者から火花が飛び交う。主翼の装甲が弾け、尾翼は欠け飛び、それでも両者は辛うじて致命傷を避けきる。

レトはバレルロールをしながらラリーを飛び越え、しかし、既に身体は次の行動に移っていた。

先程の捨身の攻撃で落とせるとは思っていなかった。たった一度のチャンス、二度目は効かない奇襲、全てはこのために。

レトは時間が惜しいとばかりに失速ギリギリの急速U字ターンを強行。

ガタガタと機体が振動し、今にもストールしそうな恐怖を捻じ伏せ、機首を標的がいる筈の空間へ向けた。

その先ではモルガンも同様にターンを決めてレト機に機首を向けようとしていたが、僅かにこちらが先に発射体勢に移る。

ミサイルシーカーが標的を捉えようと動き回る。

緊張からレトの手は汗ばみ、背中に冷たいものが流れる。

鼓動音が聞こえそうな程に心臓が高鳴り、時間が無限に感じられる。

次第に収束していく照準。

指が、震えた。

『撃て、臆病者！』

無線から聞こえてくる、慣れ親しんだ声。
たった数ヶ月だが、生死を共にした。

『撃て!』

重なるシーカーの捕捉音。

レトは発射リリースを押し込んだ。

互いの機体が交わる直前、最後の一撃が敵へ届いた。

程なくして後方から聞こえてきた爆発音を、レトは茫然と聞いた。

刹那、遙か上空で巨大な光の塊が弾けた。

遅れてやってくる、衝撃波と雷の様な轟音。

管制機がやられた事で、V2の自爆装置が働いたのだ。

まるで新世界の太陽のようだと、レトは漠然と感じた。

サイファー、任務完了だ

A W A C Sから自分のT A C ネームを呼ぶ声で、レトは我に返った。

終わってしまった。本当に呆気無く。

彼が最後にベイルアウト出来たのかは分からない。

助かったとしても、二度と合う事はないだろう。

既に、二人の道は違えてしまったのだから。

さあ帰ろう、俺達の家へ。

お前の帰りを待っている奴らがいる

それでも、もし、偶然の巡り合せでまた出会えたなら、

平和な世界で再会出来たのなら、

その時は笑って祝杯をあげよう。

「さよならだ、相棒。・・・ありがとう」

レトはモルガンが墜ちた方へ敬礼を送ると、機体を帰路へ飛ばす。

帰ったら何をしようか。

今はまだ、祝う気持ちにはなれない。

それにPJの事もある。

彼の恋人を見つけて報告せねばならない。

自分の僚機であつた男の死に様を。

戦いがようやく終わったにも関わらず、そんな暗い事ばかりを考
えていると、レトに奇怪な現象が襲つた。

レトの機体の周りに光の粒子が集まつてきたのだ。

それらは見る見るうちに増えていき、何か只事ではない事が起き
ているとレトは焦り始める。

「おいおい、勘弁してくれよ・・・」

既に疲労困憊のレトは力無く呟いた。

もはやこの怪奇現象に抗う術も無ければ、する気力も残っていな
い。

更に増えた光の粒子はレトの機体をすっぽり覆い包み、一瞬白い
閃光を上げると消え去つた。

そこに、多くの悲しみを生んだ戦争を終結に導いた英雄の姿はな
かつた・・・

レト・アマナ。

畏怖と敬意の狭間で生きた一人の若き傭兵。
政府の記録によれば、この戦いを最後に彼の消息は途絶えてしま
う。

七つの核の影響は大きく、それを目の当たりにした戦勝国達は世
界的な軍縮へ向かう。

まるで、自らへの戒めのように。

また、？V2？の存在も隠蔽される。

終戦後に起きた出来事は人々の記憶から消え、そして彼らも同時
に歴史の闇へ封印されたのだ。

これも平和への一つの形なのかも知れない。

こうして？この世界？での物語は幕を閉じる。

だが、彼自身の物語は終わりを迎えたわけではない・・・

#00 ゼロ（後書き）

これが私の精一杯です。

空戦描写が悲惨な事になっています。

語彙力が無いため、巧みな言い回しが出来ません。

でも、エスコンZEROの最後はいつか文章にしたいと思っていたので、私なりに満足です。

ここまで目を通して頂き恐縮です。

#01 アンファミリア・フューチャー（前書き）

御無沙汰して大変申し訳ありません。リアルの忙しさを甘く見ていました。

本格連載と言いたい所なのですが、将来の職場探しとかも色々大変なので、ちょっと厳しいです。

言い訳がましくて恐縮なのですが、たまに思い出して更新を発見したら、なんだ作者生きてんのか程度の気持ちでも読んで頂けたら幸いです。

#01 アンファミリア・フューチャー

どんよりとした曇り空、そう遠くはないどこからか響き渡る幾つもの軍用機から出る排気音。

その重苦しい合奏は空気振動を伴い、決して綺麗とは言えない古い街並みを構成する建物を叩き窓ガラスを小刻みに震わせる。

それでも銃声が混じっていないだけ今日はマシな方であり、通りを行き交う人々は特に反応を示す事も無く俯き加減に足早に去っていく。

終わりの見えない紛争、止む事の無い報復の応酬。人々は日々の糧を得るために精一杯で、国家は守るべき民に只々血と鉄を要求する。

もはや何が争いの原因であつたのかすら曖昧で、束の間の平穏さえも嵐の予兆と悲哀した。

そんな疲れ切った諦観が支配する街の中で、その少年は唯一人顔を上げて空を見詰めていた。

その視線は分厚い雲さえ突き破るかの様に真っ直ぐで、夜の湖面の様に黒い瞳は未だ希望を捨てていなかった。

だからだろうか、その少年がすすり泣く様な誰かの声に気付いたのは。

小さくか細いその音は、本来ならば街中にうねる暗い重低音に紛れて誰の耳にも止まらない筈であつた。

一体どこから、と少年は辺りを見渡すと、通りに並ぶ廃墟となつた建物の壁の下、蹲るように座り込む小さな女の子を発見した。

戦火の絶えないこの地では今時ストリート・チルドレンなど珍しくなく、街の住人にとっては見慣れた光景で気にも留めない。

だが、自身も孤児であり似た様な境遇であつた少年には、その少女を見捨てるという選択肢はなかった。

「泣いているの？」

「っ！・・・ぐす・・・」

少年の呼び掛けに少女はビクツと震える。それでも顔は俯いたまま、鮮やかなブロンドの長い髪が今にも崩れてしまいそうな細い体を包み込む。

不思議な事にその黄金色の髪の毛は少しピンクがかっており、綺麗だなと見とれつつも少年は少女の横に座り込む。
独りじゃないよ、と安心させるかのように。

この御時勢、子供が路上でたった一人で泣いている理由なんてだいたい決まっている。

親を亡くしたか、捨てられたかのどちらかだ。

それは少年自身の体験談でもあり、だからこそ少女に涙の原因を尋ねる様な事はしなかった。

「大丈夫さ」

「・・・なに、が・・・？」

その自信に満ちた声に、少女は戸惑った。

もはや何もかも失ってしまったのに。

自分自身じゃどうしようもない程悲しいのに。

こんな消してしまいたい現実の、一体何が平気だと言うのか。

「君は生きている。だから、大丈夫」

何の根拠もない、けれど妙に説得力のある断言。

その力強い声音は寂しさと不安で打ちのめされていた少女の心に

染み渡り、何か暖まるものを感じさせた。

そして、その温もりは僅かながら少女に気力を与え、顔を上げて隣に座る少年へと振り向いた。

「あなたは、だれ・・・？」

「ッ！・・・」

なけなしの勇気を振り絞った、少女の儚くも美しい声。

怯えている様でいて、それでも僅かな希望を掴もうとする懸命さを感じられて。

少年はその新しい絆を孕んだ問いに応えようと少女の方へ向き、しかし、息を飲んで言葉を紡ぐ事が出来なかった。

少女の顔がまるで靄がかかっているかのようにはつきりと判らず、顔の輪郭さえも曖昧であったのだ。

確かに覚えていたはずなのに、どうしても思い出せない。

肝心な所に限って虫食い穴の様にぽっかりと忘れられていて、それがどうしようもなく虚しくて。

それでも何とか必死で思い出そうとした時、唐突に世界が消えた。轟く排気音も、旧く疲弊した街並みも、目の前の少女も。

そして、一瞬真つ黒い闇が覆ったかと思うと、今度は見渡す限りの純白が広がった。

上も下も時間すら感じられず、ただ光に満ちた空間を当てどなく漂う。

酩酊しているかのように思考はまとまらず、しかし、どこからか聞こえてきた声に気付いた。

「すまない・・・わた・・・子よ・・・」

年老いた男性だろうか、まるで懺悔をするかの様なその声は擦れていて聞き取り辛い。

誰だ、と疑問を投げ掛ける事も出来ないまま、ただ漠然と聞き覚えのない声に耳を傾ける。

「せめて・・・なる・・・世界で幸あれ・・・」

老人の短い独白が聞こえなくなると、周りを覆う光が急速に輝きを増して行った。

目を閉じて闇に逃げる事も出来ず、なすがままにその眩い奔流に蹂躪される。

なるようになれ、と抵抗を止めると、自分を構成する何かが流出するような、また集まるような未知の感覚が身体を支配する。

同時に段々と意識が遠のいていき、何もかもがぼやけていく。

ただ、薄れゆく視界の中、あの少女の笑顔を見た様な気がした。

いつからだろうか、その顔を思い出せなくなったのは。

まだ自分が小さい子供だった頃、愚かしい程に無邪気な夢を広げたあの大空と共に在った大事な記憶。

ひどく懐かしくて、楽しくて、ちよつと寂しくて。

自分の中心を確かに占めていた筈なのに、いつの間にか希薄となっていた。

あの時見た鮮やかな景色は、未だ褪せていないというのに。

「ぐ、う・・・」

レトはぐもった声を上げると、次第に意識を覚醒させていく。

何やら妙に懐かしさを感じる夢を見ていた様な気がするが、内容は漠然として思い出せない。

しかし、夢とは往々にしてそのようなものであり、気にしない事にした。

身体は目覚めを拒むかのように自由が効かず、それでも何とか重い瞼をこじ開ける。

少しずつ視界が明けていき、そして、そこに飛び込んできた光景にレトは絶句した。

「・・・・・・・・」

キャノピー越しに広がる無限とも思える漆黒の闇と、そこに所狭

しと散りばめられた星々の輝き。

地上からはまずお目に掛かる事は出来ないであろう遠く小さな恒星から、無数の星達が流れる川の様な光の帯、魅惑的なグラデーションを描くガス状の星雲までありとあらゆる天体が一面を覆い尽くす。

宇宙、そこには遥かなる大宇宙が拡がっていた。

「・・・何の冗談だ、これは・・・」

暫しの間見惚れていたレトは我に返ると、あまりの状況の変化に驚きを通り越して飽きた様に呟いた。

今まで見た事もない圧倒的な美しさを放つ光景を前に、もはや慌てふためく気分にもなれず、逆に冷静になって事の経緯を振り返る。モルガンを撃墜し、帰還しようとしたら光の粒子に包まれ、目が覚めたら宇宙にいた。

意味が分からない。

そもそも本当にここが宇宙であれば、唯の戦闘機が、正確にはその搭乗員が無事でいられる訳がない。

宇宙空間では太陽の陽が当たらない限り極寒であり、何より空気も無ければ気圧も無い。

与圧された宇宙服ないし密閉空間でもない限り、人間が生存する事は許されない世界なのだ。

と、そこまで思い至ったレトは、自分が今いるコックピットが全く見知らぬものである事に気が付いた。

少なくとも、自分が今まで搭乗して来たどの機体にも該当しない。両腿の間にあった筈の操縦桿は跡形も無く、F-22などの最新鋭機に採用されているサイドスティック方式となっている。

右が操縦桿、左がスロットルレバーだと思われるが、どちらもステイック形状自体は殆ど同じである事が気になる。

また、正面には見飽きたアナログ計器など一つも存在せず、どうやら一枚の大型ディスプレイに集約されている様であった。

宇宙での運用という事もあり、アビオニクスは相当高度なものとなっている事が推測出来る。

後ろを振り返って機体の形状を確かめて見ると、主翼が前方に角度が付いた前進翼機である事が判り、まさかモルガンか、と思ったがすぐさま違うと考えを捨てる。

ベルカ空軍の英知を結集して造られ、自分を最後まで苦しめたあの超最新鋭機も随分先進的なデザインをしていたが、この機体は兵器としてより洗練とされており、何か既存の戦闘機とは異質な印象を受けた。

次にレトは、自分の恰好も全く違うものとなっている事に気付いた。

オリーブ色の飛行服であったのが灰色のピッチリとしたスーツとなり、その材質は樹脂系のようである。

ヘルメットはパイロットスーツと接続されているのか顎下まですっぽり覆い、顔の前面は透明なスクリーンとなっている。

形状から察するに、もしかしてこれは宇宙服も兼ねているのだろうか、とレトは不安になった。

どう見てもスーツ内が与圧される様な構造とは思えなかったからだ。これで船外活動を行えると言うのであれば、非常に高度な技術で作られたものであると言えるだろう。

「まるでSF映画だな」

戦いばかりであったレトの日常の中にも、娯楽というものは少なからずあった。

映画はその最たるものであり、とあるSF作品で宇宙空間を飛び回る前衛的な戦闘機を見ては仲間と共にあんなの有り得ないと笑ったものだ。

まさか自分がその有り得ないものに乗る羽目になるとは、と思わず苦笑してしまう。

一通りどうにもならない現状を認識すると、レトは唯一の情報源であるだろうメインディスプレイを調べ始めた。

表示されている言語が慣れ親しんだ英語である事にホッとすると、まずこの機体の事や現在地を確認する。

初めて触れる端末に苦心しながらも、調べた結果としてこの機体はVF-19Aと呼び所属不明である事、現在地はメサイア025と言うM55恒星系第三惑星の近くである事が分かった。

通信機能も発見し、とりあえず全ての回線をオープンにしておいた。

近くで何か宇宙船とかが通れば通信を傍受する事が出来るかも知れない。

そして、これは驚愕とも案の定とも言つべきか、今日の日付が見事にぶっ飛んでいた。

「2057年・・・未来の世界、か」

所謂タイムスリップというやつだろうか、自分がいた時代から半世紀以上も先の世界である。

薄々感付いてはいたが、まさか本当に遠い未来に来ているとは。

端末で検索した地球の位置は遙か彼方、それこそ既存の常識の範疇で考えたら一生賭けても辿り着けないような場所にあり、例えば今地球で知り合いに会ったとしてもヨボヨボの老人となっているか、空に還っている事だろう。

しかし、唯のタイムスリップだとしたら戦闘機や飛行服までも変

わっている事に説明が付かない。

もはや自分の常識がどこまで通じるか疑わしいが、普通に考えるならば誰かが自分の服を替えて機体に乗せ替えたのだろう。未来に連れ込んだのもソイツである可能性が高い。

一体誰が、何の目的でこんな愉快な事をしでかしたのか。

「いや、もしかしてあの声が・・・」

レトが臆気ながらに思い出したのは、気を失っている間に見た夢の最後に聞こえた老人らしき声だ。

誰かに謝っていた様な気がしたが、あの声の主がこの諧謔にならない状況に自分を陥れた張本人ではないだろうか。

だとすれば、その老人ならばこの状況を解決出来る可能性があると思われるが、今いない人物を当てにしても仕方ない。

そもそも唯の幻聴であつたのかも知れず、本当にいるかどうかも疑わしいのだ。

いや、実は案外近くに仕掛け人が潜んでおり、自分の反応を楽しんでいるかも知れない。

随分大げさで手の凝った悪戯だが、残念ながら自分にはこれ以上大したリアクションは期待出来そうにない。

だから、さっさとネタ晴らしに出て来い。お礼に全力でぶん殴つてやる。

と、やる事がないため益体の無い思考に耽っていると、通信機が何かの信号を捉えた。

「これは救難信号か？」

救難信号、それは他の誰かに助けを求めるための機能である。そう心の中で再確認するとレトは、ハッと何かに気付いた。

自分も救難信号を真つ先に出すべきであつたのだ。

通常戦闘機の救難信号はベイルアウトした後自動で発せられるものであるので、機内で使用すると言う発想に到らなかった。

思わぬ盲点に少し気落ちしたレトだが、何はともあれこの救難信号は近くに自分以外の人間がいる事を示している。

もつとも、この信号の発信源であるだろう宇宙船が何かに乗っているのがエイリアンでなければの話ではあるが。

とにかく一刻も早く助けに行つて合流を果たしたい所なのだが、しかし、レトはある致命的な問題を抱えていた。

「どうやって動かすんだ、此奴は・・・」

何せここは宇宙なのだ。

いかに操縦機構がレトの良く知る戦闘機と似ていると言っても、大気や重力が無いため地上とは操縦概念自体が根本から異なる。

空気抵抗が無いため失速する恐れはないが、逆に言えば減速させ辛いと言う事であり、その場合には進行方向に向けて推力を発生させる機構が必要となる。

機体の方向転換もラダーやエルロンではなくメインエンジンの推力偏向や姿勢制御用エンジンのみで行われ、この戦闘機に翼が付いているのは大気圏内における機動も想定しているためだろう。

また、宇宙では墜落する恐れもないが、慣性が強く作用するためより繊細な操縦を要求される。

必然的にパイロットに求められる技量は非常に高度なものとなり、特殊な訓練を積まなければともに飛ばす事は困難であるだろう。当然レトに宇宙飛行の経験などある筈もなく、例え機体を動かせたとしても目的地へ無事辿り着けるかどうかは甚だ疑問であつた。下手をすれば永遠に宇宙の迷子となる可能性もあるのだ。

「クソ、どうすればいい・・・」

少し焦りの色を見せながらレトは端末から操縦方法を検索するが、どれも緊急時の対応マニュアルのみで目当てのものは見つからない。それはむしろ当然の事であり、普通は操縦の仕方を知らない者が戦闘機を動かす事態など全く想定しないだろう。

ならば自動操縦で動かそうとも考えたが、未知の端末で設定手順など分かる筈もなく、そもそも現場に着いた所で救出などという繊細な作業が出来るとは思えない。どのみち手動による操縦が必要である。

限られた時間の中、レトは必死に解決策を模索して頭を回転させる。

無茶を承知で飛ばしてみるべきか、別の第三者が助けに来るのを待つべきか。

仕舞には耳鳴りのようなものが聞こえてきて、しかもその音は次第に大きくなっていく。

やがて無視出来ない程に高鳴り始めたそれは、ついにはレトの脳髓の奥底を決るかの様に刺激して苦悶の声を上げさせた。

「ぐ、が・・・なん、だ、これはっ・・・!!」

レトはかち割れてしまいそんな激痛に思わず頭を抱え込むが、その力に反発するかのように脳裏に大量の知識が溢れ出てきた。

そこには現在搭乗している機体を構成する機械の名称や機能に始まり、宇宙空間における操縦方法や戦闘機動に到るまで、この？可変？戦闘機で不自由なく作戦行動を取るためのあらゆる情報が盛り込まれていた。

当然、レトの元いた世界では在る筈もない未知の技術ばかりだ。

「熱核ばースト・・・ピンポイント、バリア・・・ガーウおーく・・・

・・・？

知らない・・・こ、こんなの俺は知らな・・・グッ！？」

知らない？本当にそうであろうか？

まるで元々どこかの箱に仕舞われていたのが、鍵を開けて飛び出してきたかの様に感じる。

何も知らない筈なのに、全てを理解して馴染んでいく。当然であるかの様に受け入れて、いや、元ある場所に戻っていただけなのか。あたかも自分が再構成されていく様であり、けれど代わりに大事な何かが流出していく様な奇妙な感覚が痛みと共に身体を支配する。もはや夢と現の境界で思考は曖昧となり、レトはただ只管耐えるしかなかった。

どれ程の時間が経ったであろうか、途方もない年月だった様にも、ほんの一瞬であつた様にも感じられる。

やがて知識の奔流は収束し、それと共に痛みもひいて行つた。

「はあ、はあ、はあ・・・どうしたつて言つんだ、俺は・・・」

レトは荒げた呼吸を整えると、まだ偏頭痛の残る頭を振って覚醒を促す。

前を見やると、先程まで操作に手古摺っていた機内端末のメインディスプレイが視界に入った。

分かる。

どうやってアビオニクスをいじるのか、それこそ自動操縦の仕方まで“知っている”。

それだけではない。この可変戦闘機の操縦方法から様々な状況に応じた戦闘機動の取り方、機体独特の癖まで数多の訓練を、いや、

実戦を積んできたかの様に知っているのだ。

勿論自分は宇宙で戦った憶えなどないし、そんな事が出来る環境にいなかったのは明らかだ。

何か異常な事態が自分の身に生じたのは間違いない。

一体何が原因なのかは分からないし、今考えても答えが出る事でもないのだろう。

しかし、これで状況は好転した。機体を動かす事が出来るのだ。とにかく今は確実に出来る事から進めていくべきだ、とレトは思考を切り替える。

さっそく端末を操作して待機モードから起動シークエンスを立ち上げると、操縦桿を握って簡単な動作確認を行う。

ヘルメットはHMDヘッドマウントディスプレイを兼ねていたようで、眼前のスクリーンに速度や方位などの機体情報、機関砲の照準が表れる。

続いて本格稼働し始めた熱核タービンによって機体が僅かに振動し、メインディスプレイに表示された各種計器も踊り始める。

まるで、早く自分を解き放ってくれと訴えているかの様だ。

「機体に異常なし、各種兵装スタンバイ・・・よし、行ける」

最終確認を終えると、レトはスロットルレバーを押し込んだ。

すると、反応炉で生まれた膨大な熱量が燃焼室を包み込み、急激に加熱・膨張された推進剤が高温高速なプラズマ流となって推力偏向ノズルから一気に噴出し、その反力によってF-19Aは勢い良く発進した。

このまま最大戦速まで加速して、今も発信され続けている救難信号が示す目的地まで最短経路で飛行する。

最大戦速と言っても宇宙では基本的に全ての物が遥か遠くにあるので、近くに岩礁等でも無い限りその速さを体感する事は出来ない。せいぜい加速Gを感じる程度で、内心人生初の宇宙飛行に淡い期

待を抱いていたレトは何だか肩透かしを喰らってしまった。

「間に合えよ」

祈るような呟き。

あの世界でようやく戦いを終えたと思ったら、今度はいきなり見知らぬ未来で遭難する羽目になった。

正直不安が無いと言ったら嘘になるし、この先何が待ち受けているのかなんて全く分からない。

けど、それでも救える誰かがいるのなら、救える力が自分にあるのならば。

例え偽善だと、愚かな理想だと罵られても構わない。
もう、迷う事はしなくなかった。

「フン、楽なもんだぜ」

前の行く獲物である輸送船を追い掛けながら、男は愛機であるV F-11の操縦席で嘲笑混じりに口づいた。

その言葉に反応して、同種の機体で周りを飛ぶ仲間から通信が入る。

『全くだ。俺達の手には掛かれりや護衛なんていないも同然だぜ』

『もう面倒臭えよ、ガストン。ここでこの船墜としちまおうぜ？
どうせ捕まえたって皆殺しにしちまうんだし』

「馬鹿野郎！積荷が燃えちまったら意味ねえだろが。
オメエは黙ってこの先にある母艦までコイツを追い込めばいいんだよ」

まったくこの単細胞が、とガストンと呼ばれた男は心の中で続けた。

自分達海賊にとっては略奪が主目的であり、殺しは唯の手段に過ぎないのだ。

もっとも、その手段と目的を履き違えている奴は腐る程いるのだが。

『そうだぜ、リーギン。もし女が乗ってたらタップリ可愛がつてやるんだからよ』。

ま、穴の違いが分からないテメエには関係ない事かも知れねえけどなあ・・・ギャハハッ！』

『ウツセエよカジョ！！年中発情してるせいで脳味噌溶けちまってるじゃねーのか！？

なんなら今身体ごと溶かしてやってもいいんだぜ？』

「黙れこの脳たりん共がつ！！
たかがどノーマルのナイトメアー機墜とただで調子乗ってンじゃねえぞ！！

へマこいてお頭に手前の腐れナッツを潰されたくなきゃ、ちったあ

真面目にやりやがれ」

ガストンは怒鳴り散らすと、腕は悪くないが頭のネジが幾つかイカれている二人の同僚に辟易とした。

今度お頭に陳情して人員を替えて貰おうか、と真剣に考え始めてしまう。

『ビビり過ぎだぜ、ガストン。こんな孤島に早々助けなんかこねえさ』

カジヨの言う孤島と言うのは、この辺りの宙域のある特徴を比喻したものだ。

広大な宇宙の中で何十光年という非常に長い距離を往来する輸送船は、フォールド航法と呼ばれる一種のワープ現象を利用した超時空航行技術によって、推進器を用いた通常航行より遥かに短い時間で目的地に辿り着く事を可能としている。

この画期的な航法によって人類は本格的な宇宙移民時代を迎える事となったのだが、しかし、決して万能な技術ではなかった。

宇宙にはフォールド航法では突破出来ない、フォールド断層と呼ばれる次元の裂け目が数多く存在しているためだ。

この宙域の近くにも大きなフォールド断層が存在している事が判明しており、フォールド中の宇宙船は航路によっては断層の手前でデフォールド、つま

り超時空から通常空間へ抜け出す必要がどうしてもあるのだ。

今回不幸にもガストン達に狙われる羽目になった輸送船もデフォールドした直後を狙われたのだが、当然丸腰だった訳ではない。

基本的に各航路の治安は宇宙規模で展開している新統合軍によって維持されているが、さすがに全宙域をカバー出来ている訳ではな

くどうしても穴が生じてしまう。

そのため、輸送船側は海賊などのならず者が出現しそうな場所を通る際には、必ず護衛の戦闘機を付けるのが鉄則となっている。

大きな運輸会社であれば独自の護衛部隊を有している所もあるが、多くの中小規模の会社にはそんなものを維持する資金などある筈もなく、銀河ネットワークの管理組合からその都度護衛を雇っているのが実情であった。

それでも訓練自体はきちんと受けており、軍からの流れ者もいるため極端に質が劣っている訳ではないのだが、どうやら今回は相手が悪かった様だ。

『まったく、ダリィーなあ。』

俺達の艦まで後どれくらいだ　　って、何だこれはクソッ!!』

「おい、どうしたリーギン？」

『俺の機体がレーダー照準されてやがる!! 一体どこから!!?』

『馬鹿な、アクティブステルスが働いているんだぞ!？』

こつちの探知機には反応なんて・・・いや、後方に所属不明機の熱源! 速いぞっ!!』

「落ち着け野郎共!

この距離まで近付いて来たって事は、レーダーによる継続的な捕捉は出来ない筈だ。

散開して적을絞らせるな!!」

ガストンの掛け声と共に各機は輸送船の追尾を一端中止し、所属不明機からの攻撃を避けるため三方向に急速展開する。

現代の戦闘機による宇宙戦は、その無限なるフィールドで繰り広

げられるにも関わらず殆どが有視界で行われる。

その唯一にして最大の原因が、アクティブステルスと呼ばれる電子対抗手段の存在である。

アクティブステルスとは機体に照射されるレーダー探知波を分析し、逆に欺瞞情報を送り返す事で相手の捕捉妨害を行うシステムの事であり、今ではどの戦闘機にも標準装備されている。

アクティブステルスの隠密性能は非常に優秀であるため、捕捉手段は可視光か赤外線による熱源探知に限られ、レーダー誘導による長距離ミサイルと言う従来の主たる攻撃手段をほぼ完全に封じ込めてしまった。

そのためアクティブステルス機能を持つ機体同士が戦闘を行う場合は、必然的に攻撃手段が赤外線画像誘導式の短距離ミサイルや機関砲による有視界戦闘、いわゆるドッグファイトに限られてしまうのである。

また、アクティブステルスはパッシブステルスと違い機体形状に制約が無いため、特に大気圏内機動を意識して積極的な空力性能の向上が図られたのも格闘戦を助長する要因となった。

無論、相手よりアビオニクスが優れていたり、標的がステルス性を持たない物体である場合にはレーダー誘導式ミサイルが有効であるので、作戦内容によっては現代でも装備される事がある。

今回リーギンがレーダー照準を受けたのは、相手が偶々レーダー誘導ミサイルを搭載しており、且つ、アビオニクスも若干ではあるが優っていたために起きた出来事であった。

『単機で来るとは舐めた野郎だぜ。一体どこのどいつ・・・まさか軍か！？』

「いや、軍には一人で特攻かます根性入った馬鹿なんかいねえぜ。それにここはヤツらの管轄外だ」

『誰だろうと構わねえ！俺をコケにしゃがつて！！
こっちは三機、マッハでハチの巣にしてやんよ！！』

「オイッ、勝手に前へ出るなっ・・・て、クソ！あの単細胞がッ！
」

『ああなったら止められないぜ、ガストン。
なあに、たったの一機だ。俺達全員で掛ければ速攻でイツちまうさ
！！』

頭に血が上って所属不明機に突っ込んでいくリーギンをガストンは宥める事が出来ず、仕方無く追隨する。

カジヨもヤル気満々と言った感じでガストン機を追い抜き、相手を有視界に捉えるべく加速して行った。

彼我の相対距離はどんどん縮まって行き、程無くして正体不明の敵の姿をガストンの眼が捉えた。

「VF-19、エクスカリバーだと？なんで現役の特殊作戦機がこんな所に居やがる！？」

・・・まあ良い、どちらにしろ叩き潰すのみだ」

VF-19、それは一世代前の新統合軍主力機であり、VF-171にその座を譲った今でも高い単独作戦遂行能力が評価され一部の特殊作戦に従事している。

因みにVF-19Aはその初期型であり、後の正式量産型と比べかなり高度な操縦技量が求められる事で知られている。

リーギンの機体がリーダー照準を受けた理由もこれで納得がいく。何せガストン達が駆るVF-11は既に退役している更に一世代前の機体なのだ。軍から横流しされた元主力機とは言え、さすがに

旧式である事は否めなかった。

しかし、ガストン達はVF-11をただ古い状態で乗っている訳でなく、当然アビオニクスを含めた内装パーツを新しいものにアップデートしている。

エンジンも強力なものに換装しており、こと宙間戦闘に限って言えば現行機に対してもそうそう引けを取るとは思っていなかった。

数的有利を活かせば問題無い、とガストンが腹を決めた所で、突然相手から通信が入ってきた。

『無線を傍受して聞いていたが、どうやらアンタらは碌でもない連中らしいな。

さっきのは警告だ。死にたくなければとっとと失せろ』

自分達よりずっと若い声で切られた、ある種お決まりの啖呵。

それが余りにも堂に入っていて、ガストンは啞然とした。

状況が分かっているのか、と。

相手は三機、タイプはVF-11だが出力が違う。かなり改造されている様だ。

突っ込んでくる二機は大した事はない。奥にいる奴が少し厄介か。

レトは素早く海賊らしき敵機を評価すると、戦闘機動を取り始める。

『ふっざけるなあああ！！くたばるのはデメエの方なんだよッ！』

案の定と言うべきか、警告を聞かず機関砲をぶっ放しながら迫ってくるレーギン機。

その単純直情な突撃をレトは余裕を持って避けると、機体をガーウォーク形態へと変形させた。

一对のエンジンブロックが下垂し、膝部分で折れて鳥の様な逆関節の脚部となると、大きく開いた推力偏向ノズルからの逆噴射によって減速させながら姿勢制御を行いその場でターン。

続け様に機体下部に収まっていた両腕ブロックが翼上に回りながら左右に展開し、右手に握られたガンポッドがレーギン機の機関部を捕捉、口径五十五ミリの銃口が火を噴き複合重金属製徹甲弾が音無き世界を突き破った。

変形が始まってから瞬く間に一連の動作が完了し、その流れる様な動きに付いていけなかったレーギンは何とか致命傷こそ避けたものの、被弾によって右翼がボロボロとなってしまう。

ここがもし大気圏内だったら墜落をしている事実、レーギンはたまらず慄いてしまう。

もつとも、攻撃を実行した当の本人が一番驚いていたが。

いくら知っているとは言え、初の宙間戦闘でここまで滑らかに動けるとは思っていなかったのだ。

『オラ逝けえ！！』

今度は真上からカジョ機が仕掛けてくるが、レーギンを攻撃していた際にも他機の動きを把握していたレトは慌てる事なく機体をフ

アイター形態、すなわち通常の戦闘機の形状に戻すと、急加速して射線から逃れる。

その間に後ろで控えていたガストンはレト機をしっかりと捕捉して多弾頭ミサイルを発射。

ミサイルは追尾する過程で二分割となり、そこから更にそれぞれ四分割されて都合八発の小型ミサイルが殺到する。

レトは再び機体をガウオークに変形させると、逆噴射によって縦回転する事でミサイル群と逆さまの状態では対する。更に機体中央部が折れて頭部がせり出し、コックピットブロックが内側に引き込まれながら垂直に立って胴体を構成、最後に腰部の翼が置まれ人型のバトロイド形態になると、ガンポットを襲い掛かってくるミサイル群に向け掃射した。

弾丸に当たった幾つかのミサイルが爆発し、それに巻き込まれた周りのミサイルも次々に誘爆を起こして結局全てが粉塵と化した。

その噴煙に紛れてガウオーク形態となったレーギン機が奇襲を仕掛けようとしたが、数え切れない程の空戦で磨き上げられたレトの空間把握能力はその動きを察知、素早く迎撃態勢を整えて逆に徹甲弾のシャワーをお見舞いする。

「おやすみ」

『な！気付かれ 』

それがレーギンの最後の言葉となった。

破滅的な運動エネルギーを孕んだ金属の塊が複合装甲を容赦無く喰い破り、自らの宣言通りに八チの巣となって爆散した。

『レーギン！？』

『デメエ！！このクソツタレがああああ！！』

仲間がやられた事に逆上したカジヨが呐喊し、ファイター形態で逃げるレト機のケツに噛り付く。

カジヨは執拗に機関砲で機関部を狙い撃つが、しかし、まるで後ろに目が付いているかの如く寸での所で躲させる。

レト機の推力偏向ノズルは忙しく動き回り、上下左右縦横無尽に軌道を描いて赤外線シーカーの捕捉すら絞らせない。

『チツ、ちょこまかと動きやがって!!』

レトを捉え切れず、しかもその激しい機動に付いて行けず段々と離されている事に焦ったカジヨは、多弾頭ミサイルを自動捕捉モードにして残弾二発を全て発射した。

自動捕捉モードではミサイルが発射後に自動的に目標を探知するが、赤外線画像ではなく単に熱源から出る赤外線を追尾するためチャフに引つ掛かり易いので著しく命中率が下がり、おまけに敵味方の区別をしないので本来ならば緊急時以外は使用しない。

案の定、レトがばら撒いた高熱源チャフによって全十六発の内大半が誤爆し、生き残った僅かな弾頭も全て振り切られてしまった。

だが、それでもレトの隙を作るには効果があった様で、右舷下方に廻り込んでいたガストンが強襲を仕掛けた。

照準に腹を晒したVF-19Aを収め、ガンファイア。毎秒五十発にも達する破壊の罅がレトを捕えたかにみえた。

しかし、またも動きを読んでいたレトはガーウオーク形態となって真横に全出力噴射を敢行。

じゃじゃ馬の如く暴れかける機体を制御して、叩き付ける様な強烈な横Gと共に左舷に緊急回避して火線を躲した。

『馬鹿な!?!あのタイミングで避けれる筈が・・・ッ!!』

ガストンは驚愕し、一方でカジエはミサイルの弾幕によってレト機を見失いオーバーシュート、つまり相手を追い抜いて無防備なお尻を晒してしてしまう。

レトがこの機会を逃す筈がなく、すかさず後ろに張り付いてミサイルシーカーで捕捉、発射レリーズを押すと夥しい量のマイクロミサイルが我先にと解き放たれ、カジヨ機に一斉に喰らい付いた。

『チクシヨウツー！ミサイルがぶげっ

』

ブツンツとカジヨの通信が途切れ、機体は膨れ上がった火球に飲み込まれて無残にもデブリと化した。

レトはその盛大な撃破の余韻に浸る暇もなくガストン機に迫る。立て続けに仲間を失い動揺してしまったガストンは完全に虚を突かれ、初動が遅れたために相手の接近を許してしまう。

それでもガーウオーク形態となりガンポッドで牽制したのはさすがと言えるが、銃撃は全てバトロイド形態となっていたレト機のピンポイントバリア 時空連続体を利用したバリアシステムによって阻まれてしまう。

コマ落としての様に相手の懐に入ったレトはガンポッドを叩き落とすと、ミサイルの射程に被らない様に後ろに回り込んでコックピットへ銃口を向けた。

「今すぐ残りのミサイルをパージして、エンジンを切れ」

事実上の降伏勧告。

敵わない ガストンはそう悟ると無駄な抵抗を止め、素直にミサイルを全て切り離して動力を止めた。

無論、バッテリーが積まれているので反応炉が動いてなくとも最低限の生命維持システムやアビオニクスは働く。

しかし、彼の背中では冷や汗でぐっしりと濡れ、まるで酸欠にで

もなつたかの様に呼吸が荒い。

胸中にはどうしてこんな所に、どうしてこんな凄腕が、という遣る方ない理不尽さと後悔の念が渦巻く。

『何故、殺さない』

暗いコックピットの中、声が震えそうになるのを堪えながらガストンは尋ねた。

その疑問は当然であろう。先程までのレトの戦いぶりは正に抜山蓋世にして冷徹無比。

敵には一切の容赦を加えない性格だろうと思った。

「アンタはまだまともそうだったからな。それに・・・」

生き証人になって貰うためだ、と続けようとしたレトだが、レーダーに新たな二つの熱源が出現したため口を噤んだ。

海賊の増援か、と警戒を強めるレトに件の機体から通信が入る。

『こちらはマクロス・フロンティアS・M・S・所属のスカル小隊隊長、オズマ・リーだ。

救難信号を受信した輸送船から海賊と所属不明機が交戦しているとの知らせを受け、急行した次第だ。

大人しく武器を捨て、こちらの指示に従え』

歴戦の猛者を感じさせる太く力強い声がレトの耳を打った。

やがて姿を現したのはレトのと同じ二機のVF-19であり、恐らく先行する黒い機体が隊長機なのだろう。

そう長くはない台詞の中に出て来た未知の単語に辟易としながらも、レトは躊躇う事無く武器を捨てた。

小隊と言っている事から、どこかしかの正規軍人か何かである事

は間違いないし、バトロイド形態となり一遍の油断無くガンポッドを構えている姿からは相当な実力者である事を伺わせた。

これで宇宙の迷子になる事はないのだと思えば、余程理不尽ではない限りレトはどんな指示にも従うつもりであった。

『協力感謝する。』

・・・状況から察するに所属不明機とやらはお前のようだが、何故IFF（敵味方識別装置）が働いていない？

名前と所属を述べよ』

至極当然の質問であるのだが、レトにとっては非常に答え辛い内容である。

何せ機体の所属どころか、自分が何故ここにいるのかも分からないのだ。

きっと、自身の身元を言っても全く通じないだろう。

「この機体の所属は知らないし、ここがどこかも良く分かっていない。

俺の名前はレト・アマナ。ウステイオ空軍第6航空師団第66飛行隊ガルム所属の」

けれど、例えばいつどこに居ようと自分は自分、本質は変わらない。だからこそレトは、在りのままに伝えた。己という存在を。

「唯の傭兵だ」

誰も知らない世界から現れた、誰も知らない一人の英雄。彼の存在が一体どのような変化を歴史にもたらすのか。今ここに、新たな物語が始まりを告げた。

#01 アンファミリア・フューチャー（後書き）

全体的にチュートリアルみたくなり、無駄に長くなってしまいました。

色々と試行錯誤したつもりなのですが、相変わらず乏しい表現力が多かしいです。

宇宙戦闘機は浪漫です。ぎちぎちの科学じゃ語れません。それっぽく見せるだけで私には精一杯です。

独自設定などツツコミ所が多いかと思いますが、生温い目で見て頂けると助かります。

追記（11・04・06）：主人公機を変更しました。混乱を招くかも知れませんが、ご了承下さい。

#02 ステイル・コントラクト（前書き）

リアルで色々と失敗して凹んですが、挫けず頑張っ
て行こうと思います。

きっとこれは現実逃避じゃないはず！多分！

#02 スティール・コントラクト

切っ掛けは一隻の輸送船が発した救難信号だった。

新マクロス級超長距離移民船団マクロスフロンティアに駐留する？民間軍事プロバイダー？S・M・Sは、フロンティア政府との契約に基づき船団予定航路の先行偵察や補給及び兵站など正規軍に対する支援任務を主たる業務としている。

いわゆる傭兵稼業であり、正規軍より危険な任務に当たる事も多いがその分相応の報酬を得られるため、戦場で揉まれた生え抜きの元軍人や、育成機関で非常に優秀な成績を収めた者など腕に覚えのある強者達が集まっている。

今やフロンティアだけに留まらず他の船団にも支社を展開している大組織であるが、それが元々たった一つの運送会社が護衛・警備を目的に興した私兵集団であった事実は驚く他なく、母体である企業の巨大さを物語っている。

S・M・S所属のスカル小隊隊長であるオズマは、この日も長年連れそう優秀な部下にして信頼出来る戦友であるグリナムと共にフロンティア船団予定航路の先行偵察任務に就いていた。

予定コースを順調に消化し、そろそろ帰還しようとした所に受信したのが件の救難信号であった。

救出のために合流地点へ向かうと、確かにそこには商用としては一般的な中型輸送船がいたが、特に損傷を受けている訳でもなく異常が見当たらない。

何か妙だと思いつつ輸送船のオペレーターに事情を聴いてみると、海賊に襲われ逃げていたのだが、突然現れた所属不明機と海賊が交戦を始めたおかげで何とか逃げ切る事が出来たのだという。

それでもずつと救難信号を出していたのは、その所属不明機に対

して増援を呼びたかったためであるらしい。

予想交戦宙域が軍の索敵エリア外と言う事もあり、オズマは所属不明機に対してかなりキナ臭いものを感じたが、海賊を放って置く訳にも行かず現場へ急行する事にした。

『海賊相手に首突っ込むとは今時物好きな奴ですね、隊長。あのエリアは軍だって作戦を展開してない筈では？』

「あそこは目的地によつては最短航路となるが、フォールド断層があるからな。コストをケチった運送屋か、脛に傷ある奴らしいな。

油断するなよ、ギリラム。血迷った海賊はそこらの腰抜け軍人より手強いぞ」

『分かつてますって』

海賊同士の抗争かとも考えたオズマであつたが、しかし、その予想は外れてしまう事になる。

現場に辿り着くと既に戦闘は収束しており、あまつさえ件の所属不明機が海賊を捕らえていたのだ。

他にも海賊二機を撃墜したらしく、自分達と同じVF-19A

正確にはオズマは指揮官機であるVF-19Sだが に乗っている事から相応の実力を持つている事が伺える。

そもそもVF-19Aは高性能だが扱いが難しいため、軍の中でもエリートしか乗る事が許されておらず、それ以外にはS・M・Sなどの厳格に選定された外部機関に少数が供給されているのみである。

つまりは配備数及び配属先が限られている機体である筈なのだが、レト・アマナと名乗ったパイロットが言うには自分が乗る機体の所属を知らず、それどころかここがどこであるかもよく分からないと

言う。

事情を知らないオズマにとっては全くふざけた話であり、レトが告げた部隊名にも一切聞き覚えがなかった。

おまけに、声や通信モニター越しに見える顔はかなり若く、軍属であるかどうかすら疑わしい。

「ウステイオ？聞いた事がないな。それに空軍だと？この宇宙のど真ん中なか？」

『ウステイオを知らないのか？いや、空軍という部分に疑問を抱くのは当然なんだろうが。』

仕方ないだろう、俺にも何で自分がこんな所にいるのか分からないんだ！

この機体だつて今まで見た事も聞いた事もなかったし、いや、今は知っているんだが

クソ、何て言ったらいいんだ・・・』

『オイオイ、初めて乗った機体で、しかもVF-19Aで戦闘したつて言うのか？』

特殊訓練を受けたテロリストって言う方がまだ説得力あるぜ』

ギリアムが呆れたように言い放った。

彼自身もVF-19Aを手懐けるのに苦労したため、レトの言葉を俄かには信じられなかったのだ。

『嘘なんかじゃない！確かに信じられない話かも知れないが・・・いや、正直俺にも信じられない事ばかりなんだ・・・』

「・・・ここでは話にならんな。とりあえず俺達の艦、マクロス・クォーターまで来て貰うぞ。」

ギリアム、お前はその海賊の生き残りを連行しろ。抵抗したら撃ち落して構わん」

『了解』

鵜呑みには出来ないが、嘘を言っている様子にもみえない。

詳しく事情を聴く必要があると感じたオズマは場所を移す事にした。

取り調べなどは本来任務外であるのだが、軍に引き渡した場合は問答無用で豚箱行き、良くてその後司法取引がなされ奴隷の様に扱き使われる事になるだろう。

奴らは自分達の都合のためなら、例えそれが誰かの人生を左右する事でも真実を曲げて事実とする。

それはオズマ自身の体験談であり、本日にまで至る軍との確執の原因でもある。

気に入らない、とオズマは思った。

もしかしたら無意識の内に、この若者に感じ入るものがあつたのかも知れない。

オズマ達は武装解除した二機を連れて母艦へと進路をとった。

暫くすると前方に大規模な船団が姿を現し、口を開いた貝のようなドーム状の巨大居住艦を先頭に幾つもの円柱状のプラント艦が追隨している様を見て取れた。

居住艦の透明なドームから洩れる淡い環境光が宇宙を照らし、生い茂った森林や草原の緑と大きな人工湖が照り返す青が煌めく様は、さながら冷たい暗黒の宇宙にぽっかり浮かぶオアシスである。

『な、なあ・・・一つ聞いていいか？
もしかして、ここに人間が住んでいるのか？』

驚きの色を含んだレトから質問に、オズマはすぐにはその意図を理解出来なかった。

この時代では子供でも知っている常識に対して、よもや疑問を投げ掛けられるとは思わなかったのだ。

「おい、まさか船団を知らないとか言うじゃないだろうな？
移民船団マクロスフロンティア、通称フロンティア船団・・・人口一千万人以上が暮らす俺達の家だ」

『フロンティア・・・宇宙空間に大地を創って旅をしているのか！
凄まじいな、そもそもどうやってこんな巨大構造物を造ったんだ？
まさかこんなに文明が進んでいるなんて・・・』

先程までの落ち着いた大人ぶった態度とは裏腹に、見た目相応の子供の様に興味を振りまくレトに対してオズマは眉をひそめた。

「・・・本当に船団を見るのは初めてなのか？」

『見るも何も、今まで存在すら知らなかったさ。
？俺がいた時代？じゃ小さな宇宙船を打ち上げるのがやっとだった
しな』

「お前は一体・・・いや、後にしよう。
艦に着いたら洗いざらい吐いて貰うぞ」

『お手柔らかに頼む』

レトの言葉の端々に漂う面倒事の予感に、オズマは溜め息をついた。

とんでもない拾い物をしてしまった、と内心臍を噛みながらS・M・S・の空母マクロス・クォーターへと向かった。

「何度聞かれても同じだ。

歳は十五、ウステイオ空軍第6航空師団第66飛行隊ガルム所属。1995年12月31日、作戦終了後に基地へ帰投しようとしたら

「

「謎の光に飲み込まれ、気付いたら遠い未来の宇宙にいました・・・だと？」

そんなB級SF映画みたいな話を素直に信じられると思うか？

それに、お前の言うウステイオと言う国はどの時代の世界地図にも載っていない！

ベルカ戦争なる世界規模の大戦が在ったと言う事実も、歴史の教科書にすら記載されていないだぞ！？」

ダンッ！とオズマが机を叩いた。

それに対しレトは、出口の見えない押し問答に辟易として嘆息した。

マクロス・クォーターに着艦して銃を構えた警備員に囲まれるという熱烈な歓迎を受けた後、オズマに連れられて個室で取り調べを受けているのが現状だ。

マクロス・クォーターは元いた世界の原子力空母が二隻並んだ様な印象を受け、どうやら人工重力が働いているようで初の無重力体験にお預けを喰らったレトは内心がっくりした。

だが、更に残念だったのは、取り調べを受ける内にここが単純な未来の世界ではない事が分かった事だ。

オズマ曰く、ここには自分が知る国も歴史も何もかも存在していないようなのだ。

となると、おそらく地球には自分の知人もいなければ、身の証を立てるものもないのだろう。

平行世界 そんな言葉が頭を過ぎったが、そんな空想染みた事を声を大にして言うのも馬鹿馬鹿しく思えてきて、段々と投げ遣りな気持ちになってしまう。

あの救難信号を出していた輸送船が無事であった事が、レトにとって唯一の救いであった。

「信じようと信じまいと、これが事実だ。少なくとも俺にとってはな。

頭のコレは飾りなのか？」

レトは自分の頭を覆うヘッドギア 虚偽検出装置を指差してげんなりとした。

信憑性を増すために元いた世界の国々やベルカ戦争の概要、自分の簡単な経歴までも話したレトには、これ以上どうしようもないのだ。

因みにこの虚偽検出装置、いわゆる嘘発見器は精神疾患を持つ相

手にも十分有効であり、虚偽判定精度は99.7%にも達する代物であるらしい。

「確かにお前の話は良く出来ているし、装置も嘘をついた反応を示していないが……。」

ええい、お前が証拠の一つでも持っていればまだ違ったんだがな。こんなのをそのまま調書に書いてみる？俺まで笑いにされちまう」

「ご愁傷様だな」

レトは肩をすくめると、オズマへ憐みの目を向ける。もはやなるようになれ、と腹を括ったレトには逆に余裕が生まれつつあった。溜め息と共にオズマが肘を着いて頭を抱えると、ドアがノックされ誰かが入ってきた。

色黒の肌に茶髪のアフロヘアとかなり個性的な出で立ちの男だ。

「少佐、少しいいかしら」

「どうしたボビー、何か分かったのか？」

「ええ、地球の戸籍情報を過去に遡ってみたら……。」

ボビーと呼ばれた男？は困惑の色を滲ませながらオズマに資料を手渡した。

「これは……本当なのか？偶然って事は……。」

「さあ、それは分からないけど彼が言った情報とは矛盾していないわね。」

と言っても記載されている内容が少なすぎるから、果たしてこれを

戸籍情報と呼べるかどうかは疑わしいけど」

戸籍情報、それはこの世界に実在する、或いは実在した人の情報を載せた存在証明書。

この世界に元々いなかった人の情報は当然ない筈である。

「馬鹿な、俺の戸籍がこの世界にある訳がない！あんたらの話が嘘じゃなければな。」

・・・なんて書いてあるんだ？」

「嘘を疑いたいののはこっちの方だ！

ったく、読むぞ・・・戸籍名レト・アマナ。1980年10月15日生まれで血液はO型。

住所不明、出身地不明、血縁関係不明、備考欄には ? M I A (戦闘中行方不明)？」

名前、生年月日、血液型は当て嵌まっているし、捨て子であった自分には確かに出身も血縁も分らない。

しかし、住所まで不明になっているのはおかしい。戦争中はウステイオのヴァレー空軍基地に住んでいたのだから。

とは言え、この世界にはヴァレー空軍基地もない筈であり、正しく記載されていたとしても矛盾が生じてしまう。

この戸籍が自分のものであれば良いのだが、けどやっぱりそれでは話が合わず困るような、非常にややこしい事態にレトは頭を痛める。

「・・・それだけか？」

「それだけだ。ふん、確かに偶然にしては出来過ぎだが」

「偽造にしてもお粗末過ぎるわね。」

スパイがこんな身分証を示した所で入管を通れる筈がないもの」

「スパイか、なるほど。だとしたら俺はとんだ間抜け野郎だ。」

あの輸送船を見捨てていれば良かったんだからな」

「黙れ小僧！言っておくがお前があの輸送船を救ったのが事実だとしても、本来民間に出回っていない筈の機体に乗っていた不審人物、いや軍用機不正入手の容疑者である事には変わりはないんだぞ！！」

オズマが怒気を込めて捲し立てると、レトは言葉通り押し黙って肩をすくめた。

無論、まだ少しあどけなさが残るその顔には一切怯えた様子はなかったが。

「まあいい、この際身元の特定は一旦置いておく。
問題はお前のこれからの処遇をどうするかだ」

「そうねえ、このままじゃフロンティアに入れないし、かと言って軍に引き渡したら何をされるか分からないわね。」

とりあえず処遇が決まるまで私が面倒見てあげようかしら？

よく見たらイイ男だし、私がその寂しい心を癒してあげるわよん」

うふっ、とオカマから熱い視線を向けられたレトは思わず口を引き攣らせ、真っ青になった顔をブルブルと左右に振った。

吐き気を何とか堪えたのは称賛されても良い位である。

「はあ・・・それじゃ一時凌ぎにしかならん所か、俺達までいらん嫌疑を受ける羽目になる。」

まったくどうしたものか・・・って何だ？しゃべってみる」

律儀に発言の許可を求めて挙手をしたレトに対し、オズマは言を促した。

「聞く所によると、あんたらも傭兵みたいなもんなんだろう？
なら俺をここで雇ってみないか？それなりに腕は立つつもりだ」

「あら、いいわねそれ。丁度機体も足りている事だし」

「馬鹿言うな！ここはフロンティア政府と契約を交わしているだぞ。
それに艦長の許可なしには」

「構わんぞ」

オズマの言葉を遮るように低く渋い声がドアの向こうから発せられると、新たな人物が部屋に入ってきた。

深緑色のコートを羽織り、黒い帽子の下から覗かせる双眸は鋭く、髭を蓄えた顔には大きな傷跡が走っている。

一目見ただけで歴戦の戦士を思わせる圧倒的な存在感は、正にハードボイルドを絵に描いた様である。

「「ワイルダー艦長！！」」

オズマとボビーは背筋をピシッと伸ばして、突然の入室者に対して敬礼を行った。

ジェフリー・ワイルダー、このS・M・S・が誇る旗艦マクロス・クォーターの艦長その人である。

二人の様子にいいよ責任者のおでましか、と悟ったレトも立ち上がって敬礼をした。

あまり上下関係に頓着しないレトだが、最低限の礼儀は弁えてい

るのだ。

「艦長権限で今までモニターしていたが、中々面白そうな奴じゃないか。」

お前がその気なら、俺は構わんぞ」

「しかし艦長！身元不明の者をそう簡単に受け入れる訳には……」

「なに細かい事を気にしているんだオズマ！

平和ボケした役人共なんざいくらでも誤魔化せる。

それに機体を調べても所属情報はなかったのだから？軍から盗難届が出ている訳でもない。

それにだ……」

ジェフリーは口をオズマの耳に近付け、小さい声で続けた。

「今は少しでも戦力が欲しいだろ。アレに備えてな」

「ッ！！確かに、それは……」

オズマは何か強い心当たりがあるのか、グツと拳を握り締めて目を瞑った。

「分かりました、コイツを雇ってみましょう」

少しの逡巡の後にジェフリーの意見に賛同したオズマであったが、しかし、再び目を開くとレトに真っ直ぐ射抜く様な視線を向けて言い放った。

「ただし、一つだけ条件がある！

我々は精鋭部隊であり、実力が無い者は唯の足手纏いになる。そして、俺はお前と海賊共との戦闘を直接見た訳ではない。お前には戦闘シミュレーターでその実力を示して貰おう！」

「分かった。じゃあ早速そのシミュレーターに案内を頼む」

「・・・着いて来い」

レトにとっては断るべくもなかった。むしろ好都合と言っても良い。

これから一緒に戦う事になるであろう人達に自分の实力を知って貰っておいた方が連携を組み易いと言うのもあるが、自分自身がどこまで出来るのか把握し切れていないのだ。

オズマがシミュレーターへ案内するために退室し、レトもそれに続こうとしたが、とある人物の前に立ち止まり疑問をぶつけた。

「ワイルダー艦長、お口添え感謝します。

しかし、自分で言うのも何ですが、どうして見ず知らずの人間に対して助け舟を？」

「言っただろ、お前さんが面白そうだからだな。

それに、こっちの都合つてのもあるんでな。若い者が気にする事ではない」

レトはその言葉に黙って頷くと、今度こそオズマの後を追いかけて行った。

二人きりとなった室内で、ボビーはジェフリーに問い掛けた。

「まさか艦長自ら出てくるとはね。何か虫の知らせでもあったのかしら？」

「さてな。それよりもあの坊主の眼を見たか？」

逆に返された質問に、ボビーは首を傾げた。

「眼？そうねえ、強いて言うなら真っ直ぐだけど、どこか濃い影が差しているというか……」

「そうだ。あれはかなりの修羅場を潜り抜け、残酷な現実を嫌と言う程味わって来た奴がする眼だ。」

それでいて淡い理想を諦め切れていない……ふっ、若さ故か」

「艦長？」

「羨ましいって事だよ」

ジェフリーは通路に出て小さくなったレトの背中を見やると、ニヤリと口元に笑みを浮かべた。

何が彼を戦場に駆り立てたかは分からないが、願わくばその行く末に幸あらん事を。

幾多の戦闘機が並ぶ広い格納庫の一画に、戦闘員や作業員問わず多くの人が集まっていた。

その人だかりの輪が囲っているのは一台の戦闘訓練用シミュレーターであり、今から件の謎多きエクスカリバードライバー VF-19のパイロットを羨望も込めてこう呼ぶ が入団テストを受けると聞いて自然と集まってきたのだ。

しかもそれが年端もいかぬ少年とあれば、以外と多い女性職員のネットワークを伝って話題が拡がるのにそう時間は掛からなかった。勿論今は業務時間内でありやるべき仕事は他にある筈なのだが、そこは数多の戦場で腕を鳴らした強者曲者達、常に何かのイベントに飢えているのだ。

そんな周りの喧騒も、シミュレーターボックスに入ったレトには届いていないだろうが。

「準備はいいか？機体はVF-19A、宇宙空間と大気圏内のそれぞれで作戦を遂行して貰う。

難易度は特殊部隊の実戦レベルだ。模擬だと舐めて掛かると痛い目を見るぞ」

『俺の時代のものとは比べられない程リアルだ。映像だけで言うなら、とても偽物とは思えないな。

こっちは大丈夫だ、いつでも始めてくれて構わない』

レトからの返事を受けたオズマは、シミュレーションを開始させた。

シミュレーター外部の大型モニターにもシミュレーションの様子映し出され、レト機の前には夥しい量の戦闘機と何十隻もの宇宙戦艦が立ち並んでいた。

この現実離れた状況下でレトに課せられた任務とは、敵軍の最

奥に構える空母に対艦ミサイルを当てるというものなのだが、その余りにも高い難易度設定にギャラリーからざわめきが起きた。

「隊長、これは入団テストのレベルじゃないですよ？」

本気でこんなのをやらせるんですか？」

堪らずギリアンがオズマに尋ねた。

率直に言うならば、彼自身これ程の任務をこなせるかどうか怪しいのだ。

「いいから見ている。接敵するぞ」

対してオズマは取り合わず、モニターに集中する。

画面上ではレト機が最初の敵部隊と交戦^{エンゲージ}を始めていた。

レトは敵に対して真正面から向かう様な事はせず、死角に回り込みながら縦横無尽に飛び廻って敵部隊を攪乱し、生じた綻びを突いて突破を図る。

反撃は必要最低限に抑え、どうしても邪魔になる機体のみを撃墜して只管前へ前へと突き進む。

四方八方から機関砲の弾が飛び交って来るが、まるで三百六十度全ての視界を同時に見ているかの様に弾道を予測して躲し、迫ってくる無数のミサイル群すらも変則機動で振り切って、しつこいもののみガーウォークやバトロイドに変形して直接撃ち落とす。

艦隊から雨霰の様に降り注ぐ弾幕もフレンドリーファイアを誘う様なルートを選んで的を絞らせず、あまつさえ時には艦橋にフライバイを行いまるで嘲笑うかの様に敵陣を蹂躪して行く。

このシミュレーターは重力加速度すら忠実に再現するため、レトにはその驚異的な戦闘機動に見合う強烈なGが働いてるはずなのだが、機体の動きは衰えるどころか段々とキレが増していく様ですらあった。

見る者すらも楽しませるかのような躍動感溢れる機動にギャラリ―達は沸き立ち、敵機を撃墜する度に歓声が上がった。

戦いのプロ中のプロから見ても、それ程までに素晴らしい飛びっぷりなのだ。

テストに苦言を呈していたギリアンもいつの間にかモニターに釘付けとなり、オズマは何か考え込む様にレトの戦闘機動を見詰める。

やがて敵の猛攻を潜り抜けたレトは敵軍の最深に到達し、巨大な空母を視界に捉えた。

空母の周りにも戦闘機が密集していたが、もはやレトの勢いを止める事は出来ずに次々と防衛網を突破され、終には空母の懐へと潜り込まれた。

レトは空母の側面から除く発着口に狙いを定め、対艦ミサイルを発射。

もはやたった一発のミサイルを妨げるものは何もなく、吸い込まれるように発着口を潜って空母中枢に着弾。

急速反転して離脱するレト機の後方で太陽が爆ぜた様な爆発が発生し、巨大な火球が空母の周囲全てを呑み込んで行った。

そして、画面上に？ミッション・コンプリート？の文字が浮かぶと、ギャラリ―達から一斉に湧き上がった拍手と歓声で場が包まれた。

「任務達成だ。どうだ、シミュレーターの乗り心地は」

『アンタ・・・ここでは本当にこんな無茶苦茶な入団テストをしているのか？』

まさか？王の谷？クラスをこんなにすぐまた味わう羽目になるとは思わなかったぞ・・・』

「それだけしゃべれるんだったら問題ないな・・・と言いたい所だ

が、もういいだろう」

レトの質問を完璧に無視して、オズマは未だ冷めやらない喧騒を眺めながら答えた。

『大気圏内の機動も見るんじゃないのか？』

「元々空戦はお前の本職なんだろう？なら今すぐこの？特殊訓練プログラム？をやる必要はない。

それに、これ以上周りの連中の仕事を止めさせる訳にも行かないからな」

『そうか。ならこれからよろしく頼む、オズマ少佐殿』

「殿はいらん、アマナ准尉」

『じゃあ俺の事も階級付けで呼ばないでくれ。苦手なんだ、そういうのは。』

レトで構わない』

「ふん、可愛くない奴だ。

まあいい・・・レト、君をS・M・S・に歓迎しよう」

オズマとの会話を終えてレトがシミュレーターから出ると、周りでテストの様子を観戦していた人達が殺到してきた。

「やるじゃねえか、坊主！」

「まさかあのプログラムを一発で乗り切るとはな。どうだ、俺の隊に來ないか！？」

「やゝん、ちょっとこの子可愛いかも。どう？今夜辺りお・姉・さん・と」

「信じてたわよ、レトちゃん。さすが私が見込んだ男ね、うふふ」

次から次へと手荒くも暖かい歓迎　化け物が一部混じっていた様な気がするが　を受け、レトは困惑気味に曖昧な返事を返しながら対応した。

ふと、その雰囲気にも包まれたせいかな今まで張り詰めていた緊張感の糸が切れて、思わず泣き出しそうになってしまふのを感じた。

思えばここまで本当に色々な事が立て続けに起きたのだ。それこそ、誰にも話し尽くせない程に。

実際には物心の付いた頃から涙を流した記憶はないのだが、それでも捨てられた子犬の様な情けない顔ぐらいはしてしまうかもしれない。

それを他人に見せる事を良しとしないレトは、焦りもあってか思わず叫ぶように言った。

「み、皆ありがとう！これからよろしく頼む！でも、今は、少しでいいから休ませてくれええええ！！！」

その素っ頓狂な声を聞いたオズマが腹を抱えて笑い転げていた事実を、レトは終に知る事はなかったという。

#02 スティール・コントラクト（後書き）

実際の王の谷は劇中よりかなりハードであったと言う設定です。特殊訓練プログラムについては、何だかもうバレバレの様な気がします。

レトのキャラクターがぶれている様な気がしなくてもないorz

追記（11・04・20）：最後を少し変更。キャラ作りの甘さが露呈。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9952p/>

マクロスF ~イツワリノエイユウ~

2011年5月14日17時04分発行